

ボランティアグループがつくる和歌山県男女共同参画センターの書評誌

この本よんだ？

～りいぶる BOOK プラス～



「おネエことば」論

クレア・マリィ 著 青土社 2013年 (O:セクシュアリティ)

現在、さまざまな分野で活躍している「おネエ」な方々。時には、ご意見番として登場し、辛辣なコメントをしても嫌われないのは「おネエことば」を駆使しているから。

そもそも「おネエ」とは「おネエことば」とは何なのかを本書はさまざまな場面から鋭く分析している。

「おネエことば」はゲイ文化独自のものと考えられていたが、2000年代に入り、「乙女キャラ」や「おネエキャラ」のタレントがメディアに登場するようになり人気上昇する。その後、バラエティ番組でコ

メディ性を強調するためテロップを使用し「おネエことば」は視覚化されるようになり、ますます発展をとげていく。

本書を読めば「おネエことば」や「ことば」の中にひそむ要素も読みとることができるかもしれません。ぜひ、読んでみてください。(K)



色彩をもたない多崎つくと、彼の巡礼の年

村上春樹 著 文藝春秋 2013年 (K:エッセイ・文学)

この小説の登場人物たちは、これまでの村上春樹の小説に登場した人物たちに似ています。主人公の田崎つくるは、仕事の能力が高く、知的で、落ち着き払っています。孤独な生活ではあるが、不自由ない暮らしを送っています。恋人の沙羅も能力が高く、センスのよい女性です。しかし、つくるは、過去の事件が原因で心に傷を抱えており、沙羅も秘密を抱えていそうです。小説の大部分はつくるが過去の事件の決着をつけに「巡礼」をする部分です。それは過去との和解をもたらしますが、同時に失ったものに気付かされる様子が描写されており、切なさに満ちています。青年期の終わりを実感して、深い悲しみを感じるというテーマは、これまでの村上春樹の小説にも何度か登場しました。この小説は、つくるが人生

の新しい段階へ進もうとすることが書かれており、そこがこれまでと違っていきます。

しかし、小説は不完全なまま終わります。つくるが、沙羅に結婚を申し込もうと決意するところで終わってしまいます。これから彼はどうなるのだろう、と想いを馳せ、どうか幸せになりますようにと祈る気持ちは、この本を読んだ全ての人の心の中で続いていくでしょう。(A.T)



働く女性 28歳からの仕事のルール

田島弓子 著 すばる舎 2012年 (B:労働・法律)

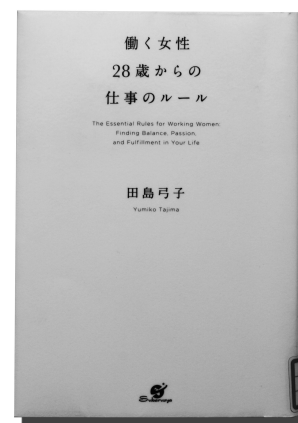
本書は、元マイクロソフト女性営業部長が教える、一生ブレないワークスタイルの基本、というビジネス書です。

ビジネス書というと、中高年の男性向けのイメージですが、題名にあるように、若い女性達に向けたエール。精神論ではなく、実例に沿った具体的なスキルと心構えの本です。

仕事には、必ずしも崇高な理念がなくとも、自分がかんばろうと思える内的動機で、小さな目の前のゴール、行動目標に全力投球すること。その与えられた仕事条件の中で、自分のメンタルを人任せにしないこと。ワークライフは、心のバランスをかんがみ

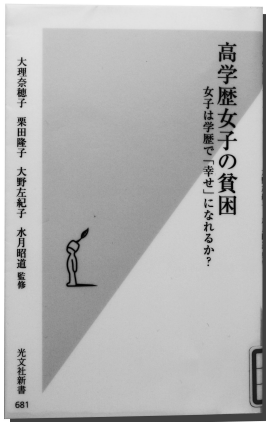
て、自ら選択すること。それは、18歳の少女でも88歳のおばあちゃんでも28歳のあなたでも同じです。

自分の食い扶持は自分で稼ぐ自活、働き続けることは、また、新たな人との出会いを生みます。自分に合った価値観の女性のお手本を探して、仕事を幸せな人生の1ピースにしてみませんか?(I.K)



高学歴女子の貧困 女子は学歴で「幸せ」になれるか？

大理奈穂子/栗田隆子/大野左紀子/水月昭道 著 光文社新書 2014年 (A:フェミニズム)



本書は大学非常勤講師の大理奈穂子、フリーライターの栗田隆子、そしてアート系高学歴女子である大野左紀子の3人の女性が登場し、それぞれの立場から自らの体験を基に高学

歴女子の困難を語っている。監修の水月昭道は、ベストセラー「高学歴ワーキングプア」(2007年刊)の著者である。

有名大学を卒業し、博士号を取得し、大学非常勤講師の肩書。何の問題があるのか

と思うが、大理によれば、女性にとってこの非常勤講師というポジションは男性よりも様々な困難を抱えている。そして、専任職を得るのは女性の方が男性よりも難しいのだという。

栗田は、ある時、近くの船舶会社の事務職に応募した。しかし、書類で落とされた経験から、単純事務に「大学院、それも旧帝大出」などは使いにくいからお断りなのだというメッセージを受け取ったという。

女性の貧困は、ひとり親家庭などに限られた話ではない、社会のあらゆるところに構造的に存在していることを知らされる一冊である。(O.S)

大丈夫やで～ばあちゃん助産師(せんせい)のお産と育児のはなし～

坂本フジエ 著 産業編集センター 2011年 (F・子育て)

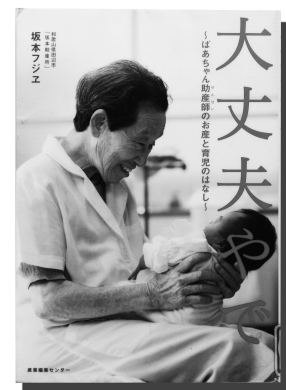
著者の坂本フジエさんは、和歌山県田辺市で助産師をしている。なんと、大正13年生まれの日本最高齢の現役助産師さんらしい。この本が書かれたときには、20歳で免許をとってから66年も助産師をしていたことになる。そして4000人ぐらいの出産に関わったという。

本書は、ばあちゃんせんせいの日常の様子、ばあちゃんせんせいからのメッセージ、そして歩んできた人生の手記の3つの構成からなる。メッセージは妊娠初期から新生児期までの子育てについてで、体験から得た育児哲学のようなもの。単純明快、説教がましくないとこがいい。そして1ページぐらいの解説がついている。必要などだけ読むもよし、最初から最後まで読むのもよいと思う。お母さんも、頭でいろいろ

考えてしまい、肩の力がはいてしまいがちであるが、ばあちゃんせんせいのメッセージを読むと「そうだったわ」とふっと力がぬけそうである。そして、お母さん

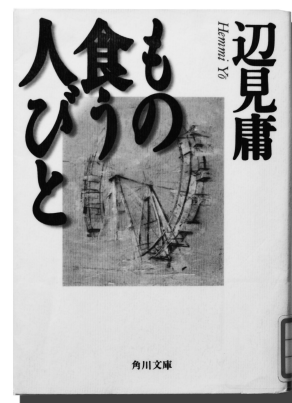
だけでなく、お父さんにも是非よんでもらいたい部分がある本である。

この本が好評で、2冊目がでていいる。乳幼児期の子育てへのメッセージが書かれている。本を読むと、こんなばあちゃん助産師にかかりたい、アドバイスをもらいたいのであるが、仕方ないので本でメッセージを受け取ってほしい。(か)



もの食う人びと

辺見庸 著 角川文庫 1997年 (K:エッセイ・文学)



「人びとはいま、どこで、なにを、どんな顔をして食っているのか。あるいは、どれほど食えないのか」を取材すべく、著者は一年半の世界旅に出る。

アジア・中東・アフリカ・ロシア等へ赴き、内戦地域、難民キャンプ地、未開地など果敢に入り込み、一ジャーナリストとして異常かつ非情な状況下、人は何を口にして生き延びているのかを直視する。

現地に滞在し、自らも同じものを飲食して体感しつ、そこから見える世界の現状や未来の予兆を思索した本である。

しかし、この著作は実は17年も昔なので、今日の視点からは色あせているのではと思う向きもあるかもしれない。が、そんなことは全然ない。同じ問題を今も抱えているからだ。

例えば、残飯を食うバングラデシュ、スラムの人々。残飯市場があり、残飯リサイクル制度までできていて、末端では腐りかけのものまで食べる現実。

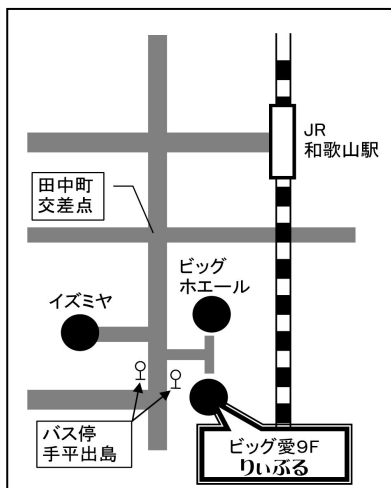
また、飢餓、内戦、死者に苦しむソマリアでの復興、人道援助の実態は、支援食料費1ドルにつき、なんと軍事費10ドルの矛盾。兵隊はごちそうを食い、ソマリア人はドッグフード以下の食しかあたえられていない。まさに米国主導のやりたい放題の軍事行動の現実。

また、チェルノブイリ原発事故（1986年）後、立ち入り禁止地域に戻らざるをえなかった人々が、食うなど言われている森のキノコや魚を食わざるをえない現実など…。

今日内戦地はいや増し、日本は原発事故後の苦しみが他人事ではなくなってしまっている。この本はだから、20年の歳月を越えて、ある意味「古典」のように私たちの胸を打つ書であると思う。 (大空)

※“りいぶる”での分類記号一覧

A:フェミニズム B:労働・法律 C:家族・結婚 D:女性・子どもに対する暴力 E:こころ・癒し F:子育て G:からだ
H:セクシュアリティ I:女性史 J:自伝・評伝 K:エッセイ・文学 L:高齢社会・福祉 M:男性学 N:資料・雑誌 O:その他
P:AV 資料 Q:コミック R:NPO サポートセンター所蔵図書



この本 よんだ? 第6号 (2014年8月発行)

◇企画・発行 りいぶるぷらす

◇協力 和歌山県男女共同参画センター“りいぶる”

【編集後記】 りいぶる広報誌が「セクシャル・マイノリティ」をテーマにするということで、今回は「この本よんだ?」のトップも関連した本を選んでみました。興味を持たれるきっかけにでもなれば幸いです。

☆ボランティアスタッフ募集!!!

あなたも書評を書いてみませんか? 興味のある方は

libreplus@yahoo.co.jp までe-mailでご連絡ください。